
ストーミーマンデイ。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリーマンデー。

【Nコード】

N1677A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

” They call it story Monday, but Tuesday's just a sad.” この言葉によっておきた僕の物語。

「月曜日は最悪だとみんなは言うけれど、火曜日だって負けずにひどい」

僕は飲みかけていたジントニックをカウンターに戻して彼女に尋ねる。

「どうしたんだい？」

「なぜかこの言葉が頭に残ってるの。小説に書かれていたのか、歌の歌詞だか思い出せないんだけど・・・
あなた誰が言ったか知ってる？」

僕は少し考えながら煙草に火をつける。

「分からないな。今度会うときまでに調べておくよ。」

「お願いするわ。」

微笑みながら彼女は答えた。でも、煙草の煙を吐きながら僕の直感が答える。

今度なんてない。悲しみに似た確信が僕の心を包み込む。

「私、もう行くね。」

「送っていいんのか？」

「大丈夫。そんなに酔ってないし、大きな道に出ればタクシーも捕

まるわ。」

僕は煙草の火を消して、帰り支度を始める。誰かとの約束でもあるのだろうか、彼女は時計をしきりに気にしている。

レジで会計を済ませていると、僕らの座っていたカウンターから一本の煙が見える。

何処かで歯車が狂ったんだよ。

そう僕に攻め立てているように感じた。

会計を済ませてバーを出ると、外は雨が降っていた。

彼女は僕に簡単な別れの挨拶をして、走って行ってしまった。走る彼女は雨に濡れ、まるで熱帯魚のように美しかった。僕は空っぽの水槽のような気分になり、数分の間そこで立ちすくむ事しかできずにいた。

駐車場に入り、雨に濡れたパンツから、車のキーを出そうとしたら声をかけられた。

「サア、イコウカ」

目の前に、僕の身長を超えとても大きなハンマーを持ったモグラが立っている。

モグラはその大きなハンマーを、使いずらそうに振り上げ、僕の頭に振り下ろした。

頭のとっぺんから衝撃が僕の体を駆け巡る。

僕の体は頭だけ残して、杭のように地面に突き刺さった。痛みを耐え、混乱する僕は尋ねる。

「どうしてこんなことを僕にするんだ。」

モグラは僕の質問には答えずに、再び僕の頭にハンマーを振り下ろした。見事に直撃し、どうすることもできない僕は地面に沈んでいく。気を失う寸前に頭の後ろからヒツヨウナンドと声が聞こえた。

目を覚ますとおびただしいほどの本が目飛び込んできた。どうも僕はソファーに寝かされているらしい。

僕は恐る恐る頭に手をやる。しかし僕の頭はへこんでなく、血も出ていなかった。起き上がり辺りを見渡す。しかし本以外は目に入ってこない。あまりにも多い本のせいでこの空間の広ささえ分らない。窓が無く、照明の明かりしかないこの空間は、とても僕を不安にさせる。

「目が覚めたようだな」

目の前の老人が僕に声をかけた。いつの間に現れたんだ。

「早速だが君は何が知りたくてここに来たんだい？」

ここにはな、知りたい事がある者しかこれない場所なんだ。

まあ、知りたいことがある者でも、なかなかここにはこれないがね。」

知りたい事はいくらでもある。

でもだめだ思考がまとまらない。

何も考えることができなくて、この状況に流されている僕は考える振りをしながら、ただただ老人の言葉を待った。

「はやくしなさい！」

わしだって暇じゃないんだ！」

老人は眉をびくびく動かしながら僕をせかす。

しかし何も浮かんでこない。知りたいことが見つからない。

僕は目の前においてある本をとり、ページをめくった。

「月曜日は最悪だとみんなは言うけれど、火曜日だって負けずにひどいって誰が言ったか分かりますか？」

僕は喋った瞬間に鳥肌が全身に走った。

僕はこんなことを聞きたいんじゃない。間違いなくこんなことを考えてもない。

誰かに言わされた。

間違いなく。

でもその言わされた質問は、空気を振動して相手に伝えるのではなく、質量となって目の前に存在しているかのような力があつた。

「トム・ジョーンズ」

老人がそう答えると、僕の頭に横から鈍器で殴られた衝撃が走った。薄れゆく景色の中に小さなモグラが肩に乗っていた。

「どつしたの？」

気がついたらそこはさっきまで僕がいたバーだった。

「ねえ、月曜日は最悪だとみんなは言うけれど、火曜日だって負けずにひどい

なぜかこの言葉が頭に残ってるの。小説に書かれていたのか、歌

の歌詞だか思い出せないん だけど・・・
あなた誰が言ったか知ってる？」

隣には彼女が座っている。僕は冷静になるために煙草に火をつけ彼女の質問に答えた。

「トム・ジョーンズ」

「その人は小説家なの？
それとも歌手なの？」

「分からない・・・
でも間違いなくその言葉を言ったのはトム・ジョーンズだよ。
間違いない。」

「今度会うときにきちんと調べておくよ。」

「お願いするわ。」

微笑みながら彼女は答えた。でも煙草の煙を吐ききった時、さっきのような悲しみが、僕の心を襲ってくることは無かった。

「私、もう行くね。」

「送っていいんか？」

「・・・お願いするわ。ちょっと飲みすぎたみたいだし。」

僕は煙草の火を消して、帰り支度を始める。

レジで会計を済ませているときに、僕らの座っていたカウンターから、煙は上がっていなかった。

店を出て、駐車場にとめてある車に乗り、彼女と同じベットに入る
ときまで、僕は熱帯魚のように雨の中を美しく走る彼女のことだけ
を。

考えるようにしていた。

(後書き)

ブルースの曲。「ストーミー・マンデイ」の歌詞、”They call it stormy Monday, but, Tuesday's just as bad.”

この歌詞が僕は締め付けられるように好きです。

僕がこの歌から学んだことは、

“月曜日が最悪だとみんなは言うけど、毎日が最悪だと言いつれぬ理由がどこにある”

そう思って過ごしています。

何もかも絶望しているように聞こえますが、そう思いながら過ごしているときずく事もありまよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1677a/>

ストーミーマンデイ。

2010年11月12日21時31分発行